プルタルコス

村川堅太郎 編

世界古典文学全集

23

筑 摩 書 房

プルタルコス　　世界古典文学全集　第23巻

昭和41年10月30日第1刷発行
昭和58年3月20日第4刷発行

訳者代表　村川堅太郎
発行者　布川角左衛門
発行所　株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8
郵便番号101—91　振替東京6—4123
電話　東京　291—7651（営業）
294—6711（編集）

0398-20323-4604　　三晃印刷／矢島製本

乱丁・落丁本の場合は，御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

テセウス　太田秀通訳　5
リュクルゴス　清永昭次訳　23
ソロン　村川堅太郎訳　45
テミストクレス　馬場恵二訳　63
アリステイデス　安藤弘訳　83
ペリクレス　馬場恵二訳　107
アルキビアデス　安藤弘訳　131
デモステネス　伊藤貞夫訳　163
アレクサンドロス　井上一訳　179
アギスとクレオメネス　岩田拓郎訳　217

ロムルス（付比較）　太田秀通訳　255
カトー（付比較）　村川堅太郎訳　279
ティベリウス・グラックスとガイウス・グラックス（付比較）　長谷川博隆訳　299
スルラ　高橋秀訳　325
クラッスス　伊藤貞夫訳　347
ポンペイウス　吉村忠典訳　371
カエサル　長谷川博隆訳　415
キケロ（付比較）　風間喜代三訳　455
アントニウス　秀村欣二訳　485
解説　村川堅太郎　525
度量衡表・貨幣制度・年表

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

プルタルコス

テセウス

一　ソシウス・セネキオ[1]よ、歴史家が地誌を書くにあたって、自分の知識の届かないところを地図の辺境部分に押しやって、「これより先は水気のない砂地にして野獣多し」とか、「眼に見えぬ泥沼」とか、「スキュティアのごとき極寒」とか、「凍てついた海」とか、何か説明しているように、私も、この対比列伝の記述において、ありそうな推理によって容易に近づくことができる時代、また事実に基づく歴史記述によって通過することのできる時代を通りぬけたのであるから、それよりも古い時代については、「これより先は不可思議と神秘に満ち、詩人と神話作者の住むところにして、信用もおけず、明確でもない」と言ってもかまわないだろう。すでに、立法家リュクルゴスとヌマ王の伝記を公けにしたので、歴史記述においてロムルスの時代に近づいたのであるから、そこまでさかのぼっても不合理ではないと考えた。そこで、アイスキュロスの言葉にあるように、

「かかる強者（つわもの）に誰が立ち向わんとするか」（『テーバイ攻めの七将』四三五）

「かかる者に誰を立ち向わせようぞ、太刀うちできるものは誰ぞ」（『テーバイ攻めの七将』三九五、三九六）

と考えめぐらしたあげく、「歌にひびく美しきアテネ」の建設者（テセウス）を立てて、「誉れ高き無敵のローマ」の父（ロムルス）に対比すべきは明白であった。さて、神話的なものが浄められて理性に服し、歴史の姿をとることは願わしいことであるが、もしそれが信ずべきことを頑強に無視して、ありそうなこととの結合を受けいれない場合には、好意ある読者がこの昔話を寛大に受けいれてくれるようにお願いしたい。

二　さて、テセウスは、多くの点でロムルスと類似しているように思われる。例えば、二人とも、正式の結婚をしていない親からひそかに生れながら、神々から生れたという光栄をもったし、

「二人とも槍取る強者（つわもの）、そは万人の知るところ」（『イリアス』七巻二八一）

であり、力とともに賢さを具えていた。さらに、最も名高い都市のうちでも、一人はローマを建設し、一人はアテネを統合した。婦女掠奪ということがつけ加えられている点でも二人は類似している。また二人とも家庭の不運と近親の怨みを免れなかったが、さらに二人は、もし芝居がかった誇張の最も少ない口伝と思われることがらの中に、真実に資することがあるとするならば、彼らが死に近づいた時、自国の市民たちと衝突したと伝えられている。

三　テセウスの父方の血筋はエレクテウスおよび土地生えぬきの最初の人々にまでさかのぼり、母方ではペロプスの子孫であった。ペロプスは富の量よりもむしろ子供の数においてペロポネソスにいた王たちの中で最も有力であった。そして多くの娘を名門の人々に与え、多くの息子を支配者として諸市にばらまいた。テセウスの祖父に当るピッテウスもその一人で、大きくもないトロイゼンの都市を建設し、当時の人々の間で雄弁な最も賢明な人として最大の名声を馳せた。当時の知慧とは、多分、ヘシオドスが特に『仕事』（『仕事と日々』）の中の格言によって、詩人自身がそれをもっていたとして有名であるような、そのような形と力をそなえたものであった。それらの格言の中の一つに、

「約束の報酬は親しき友にも確実に果たせ」（『エルガ』三七〇）

というのがあるが、それはピッテウスの言葉だといわれている。現に哲学者アリストテレスもそういっているし、エウリピデスもヒッポリュトスを「純潔なピッテウスの育て子」（『ヒッポリュトス』一一）と名づけて、ピッテウスについての栄誉を明らかにしている。

---

(1)　紀元九八―一〇七年の間に四度コンスルになったローマ人で、プルタルコスがこの英雄伝やその他のいくつかの著作を献げた友人。

さて、アイゲウス[1]はかねて子供を欲しがっていたが、伝えるところによると、ピュティア[2]から、アテネに到着するまでは女と交わらぬように命じた名高い神託を受けたという。ところがそのことを全然明瞭には言っていないように思われたので、トロイゼンに立ち寄って、ピッテウスに神のお告げを伝えた。それは次のようなものであった。

「人々の最も大いなる勇者よ、革袋の突出した足を、アテネの町に到着するまで解き放すべからず。」

ピッテウスがこの意味を了解したことは明らかであるが、彼はアイゲウスを説得してか、だましてか、娘のアイトラと交わらしめた。アイゲウスはその娘と交わった後に、ピッテウスの娘と交わったことを知り、彼女がみごもったのではないかと疑い、大きな石の下にかくして剣と靴をあとに残した。その石の中には置いたものをぴったり容れるに足る空ろなくぼみがあった。そうしておいて彼は王女ただひとりにわけを話した。そして、もし自分の息子が生れたら、そして若者になった時に、その石を起してかくしおいたものを取り出せるほどに力強くなったら、誰にも見られないように、できるだけ人々からかくれて、その品を持たせて自分のもとによこすように命じて、立ち去った。というのは、彼は、パランティダイ家の人々[3]が、自分に対して悪だくみを行ない、子供をもたないことの故に自分を軽蔑しているのを、いたく恐れていたからである。一方、パラスから生れた子供は五十人もいた。

四　アイトラが息子を生むと、すぐにテセウスと名づけられたが、ある人々は、しるしの品をかくして置いたことにちなんでそう名づけられたのだといい、またある人々は、後にアテネでアイゲウスが彼をわが子と認めたからだといっている。いずれにせよ彼はピッテウスに育てられ、コンニダスという名の監督者兼しつけ役をもっていたといわれる。今日に至るまでアテネ人は、テセウス祭[4]の一日前に牡羊を殺してコンニダスに献げ、彼を追憶し尊敬しているが、その方が、テセウスの似姿を画いたり立像をつくったりしたシラニオンやパラシオスを尊敬するよりも、はるかに正当である。

五　当時まだ、子供時代を過ぎた若者がデルフォイに赴いて神に髪の毛を献げるのが習慣であったから、テセウスもそのためにデルフォイに行った。その場所は今日でも彼の名にちなんでテセイアと名づけられているそうである。しかし彼は、ホメロス（『イリアス』二巻五四二）が歌っているアバンテス[5]と同じように頭の前の方だけを剃った。このことからこの種の髪型はテセウス型と名づけられた。

ところでアバンテスがはじめてこういう髪の剃り方をしたのだが、それは、ある人々の考えるようにアラビア人から教わったのでもなく、ミュシア人をまねたのでもなく、彼らが好戦的で近接戦に長じ、敵中に切り込む術を誰よりもよく心得ていたからである。アルキロコスも次の詩の中でこのことを証言している。

「多くの矢が射放たれることも、繁き石が投げつけられることもないだろう、
アレスが平原において戦闘の騒ぎの中に入りこむその時は。
嘆きをおこす剣の業があるだろう、
なぜならかかる戦闘にこそ、かの
エウボイアを治める槍で名高い首長たちは巧みだから。」

すなわち、敵に前髪を摑ませないように、彼らはこれを剃り落としたのである。マケドニア人アレクサンドロスも、いうまでもなくこれを理解していて、将軍たちにマケドニア兵の髯を剃れと命じたのは、戦闘においてそれが格好の摑まえどころとなるからである、という人がいる。

六　さてアイトラはしばらくの間テセウスの本当の生れをかくしていたが、一方ではポセイドンから生れたという噂がピッテウスによって弘められていた。トロイゼン人はポセイドンをことのほか崇めており、彼らにとってはこの神は国家の守護神であり、彼らはこの神に穀物や果実の初穂を献げ、また貨幣の面に三叉の戟[6]のしるしを刻みつけている。テセウスは、すでに幼少の時から、肉体の力と同時に、勇気と、精神と結合した誇りと、揺ぎない賢さとを顕著にあらわした。そこでアイトラは彼を例の石のところに連れていって、出生の真実を語り、父親のしるしの

品を取り出してアテネに向けて船出するように促した。テセウスは石の下に肩を入れて安々と持ちあげたが、船でアテネに渡る方が安全でもあり、また祖父と母がそうするように頼んだにもかかわらず、船でアテネに渡ることを承知しなかった。アテネに至る路を徒歩で突破するのは困難であり、至るところ平穏無事なところはなく、追剝ぎや悪業を行なうものどもによって危険にさらされないところはなかったのに。というのは、その時代は、手の業や足の速さや肉体の力において超自然的で疲れを知らぬともみえる人々を生み出したのであったから。しかし彼らはその素質を何一つ良いことにも有益なことにも使わずに、思いあがった傲慢を悦びとし、腕力によって残虐と苛酷をほしいままにし、手の届くところにあるものをすべて圧服し、暴行を加え、殺戮し、尊敬・正義・公平・仁愛などを多くの人々が称讃するのは、不正を加えるだけの勇気がないのと、不正を加えられることを恐れるの余りであって、それらのものは人に勝つだけの力あるものにとっては何らふさわしいものではないと見なしていた。それらのものの中のあるものは、ヘラクレスが巡歴中に切り倒し討ち滅ぼしたが、あるものは彼が通り過ぎる時にその眼を逃れ、身を屈め後ずさりして、おとなしく振舞ったので見逃された。ところが、ヘラクレスが不運に会い、イフィトス[7]を殺してリュディアに渡り、この殺害の償いを課せられて、長い間そこでオンファレ[8]のもとで奴隷として仕えた時、リュディア人の国情は大いに平和と安寧を維持していたが、ギリシアの各所では、誰一人抑えつけるものも妨げるものもいないので、悪事がまたしても栄えはびこってきた。

それ故、ペロポネソスからアテネへ徒歩で行く人々にとっては、道中は命がけの危険を伴うものであった。そこでピッテウスは、それらの追剝ぎや悪者がそれぞれどんなものどもであるのか、また旅人をどんな目に会わせるのかを詳しく語って、海を渡って行くようにとテセウスに説き勧めた。しかし、ヘラクレスの武勇の名声が早くからテセウスの心を秘かに燃やしていたらしく、彼はヘラクレスに最大の讃辞を献げ、ヘラクレスがどんな人間であったかを語ってくれる人々、ことに彼を直接見て、そのなすところや言うところに居合せた人々の、熱心な聴き手となっていた。そしてテセウスがそれを聞いた時、ずっと後の時代にテミストクレスが「ミルティアデスの戦勝記念碑が私を眠らせない」と言った時に感じたのと同じような気持にテセウスがおそわれたことは、全く明らかであった。テセウスも後のテミストクレスと同じように、ヘラクレスの武勇を感嘆し、夜はその偉業が夢となり、昼は競争心が彼を駆りたてて、同じことを行なおうとする気持をかき立てた。

七　さらにまたヘラクレスとテセウスは従姉妹の子であるから、血統を共通にするものであった。すなわち、アイトラはピッテウスの娘、アルクメネ[9]はリュシディケの娘、そしてリュシディケとピッテウスはヒッポダメイアとペロプスから生れた姉弟であった。そこでテセウスは、ヘラクレスが到る所の悪者どもに立ち向って、陸と海とを浄めたのに、自分は目前の闘争を避け、逃げるように海路を航くことによって、一方では噂と評判での父（ポセイドン）を辱しめ、他方では本当の父のところにしるしの品の靴と血にそまない剣を持って行き、立派な仕事と実行によって良い血筋の明らかなあかしをすぐさま示そうとしないことを、恐ろしい、また我慢のならないことと考えた。このような心意気と考慮によ

---

(1) アテネ王、テセウスの父。
(2) デルフォイのアポロン神殿の巫女。
(3) アイゲウスの兄弟、パラスの子ら。
(4) 前四六九年キモンがデルフォイの神託に基づいてスキュロス島からテセウスの骨をアテネに持ち帰って埋葬してから毎年ピュアネプシオン月の上旬に行なわれた祭典。
(5) エウボイアの住人で、髪を後ろに長く伸ばして、とある。
(6) ポセイドンのしるし。
(7) オイカリア王エウリュトスの子。
(8) リュディアの女王でヘラクレスを奴隷として買った。
(9) ヘラクレスの母。

って、テセウスは、何びとにも害を加えまいと、そして暴力を振うものには罰を加えようと、決心した。

八　かくてまず第一に、エピダウリアで、ペリフェテスという、棍棒使い[コリュネテス]と綽名された男が、テセウスを摑まえて前進するのをはばんだので、これと戦って討ちとった。この棍棒は武器として使い、この故に棍棒[コリュネー]を武器となし、ヘラクレスがライオンの皮をいつも身につけていたように、いつもこれを使い続けた。ヘラクレスはライオンの皮をいつも身につけて、そんなにも大きな野獣にうち勝ったということを示す証拠としたが、テセウスはこの棍棒を持ち歩いて、それは自分によってうち負かされたが、自分が持てば不敗である、ということを示す証拠とした。

またイストモスでは、「松たわめ」のシニス[1]を、シニスが多くの人々を殺したその同じやり方で殺した。しかもそれを練習したこともなければ、それに慣れてもいなかったのに、そのやり方で殺し、勇気が一切の技術や練習にまさるものであることを示した。そのシニスにペリグウネという名の美しい丈の高い娘があった。この娘が父親の殺された時に逃げ去ったのを、テセウスは方々探しまわった。彼女はストイベー[2]やアスパラガスのいっぱいに繁った場所に来ると、全く悪気なしに子供らしく、それらがあたかも人間の言葉を理解するかのように、自分を助けて隠してくれればこれから決して踏みつけたり焼き払ったりしないと誓いをたてて頼んだ。テセウスは彼女の名を呼んで、やさしく世話してやる、決して害は加えないと約束したので、彼女は繁みの中から出て来た。そしてテセウスと交わってメラニッポスを生んだ。その後テセウスが譲ったので、ペリグウネはオイカリアのエウリュトスの子デイオネウスと一緒に住んだ。テセウスの子メラニッポスからイオクソスが生まれ、オルニュトスとともにカリアへの植民市建設に参加した。こうした因縁から、イオクソスの子孫においては、男女を問わず、アスパラガスの繁みやストイベーを決して焼かず、かえって畏敬することが、祖先伝来の習わしとなった。

九　ファイア[3]と綽名されたクロミュオン[4]の猪は、ただの獣ではなく、猛猛しく、打ち勝ち難いものであった。テセウスは、この猪を、道草仕事として、立ち向ってうち殺したが、それはすべての苦業を必要に迫られて行なうと思われたくなかったからであり、また同時に、勇者は人間の中の悪者どもに対しては自分の身を守るために立ち向うべきであるが、獣の中のえらいものどもに対しては、こちらから戦いをしかけて、あらゆる危険を冒すべきであると考えたからである。ある人の説によると、ファイアは人殺しの好きな放縦な女賊で、クロミュオンに住み、その気性と生活からして猪と綽名されていたが、後にテセウスの手にかかって死んだのだという。

一〇　ついでテセウスは、メガラ領に入るところで、スケイロンを石の上から投げ落として殺した。スケイロンは、世に流布している伝説によると、通行人から物を剝いだものとされているが、またある人の説では、傲慢無礼にも両足を旅人につき出して、これを洗えと命じ、旅人がそれを洗っている最中に足で蹴って海の中につき落としたのだという。しかしメガラ出の著作家たちは、論じてこの伝説に至るや、ソモニデスの言葉を借りれば、

「長い年月と戦って」

スケイロンは傲慢なものでも追剝ぎでもなく、追剝ぎをこらしめるものであり、善良な正しい人々の味方となり友となった、といっている。というのは、彼らの説によると、アイアコスはギリシア人のうちで最も敬虔な人と見なされ、サラミスの人キュクレウスはアテネでは神として敬われ、ペレウスとテラモンの徳は誰一人知らぬものがなく、スケイロンはそのキュクレウスの娘むこであり、アイアコスの義父であり、スケイロンとカリクロとの娘エンデイスの生んだペレウスとテラモンの祖父であるから、高貴な人々が、最も偉大で最も尊敬すべき人々をやったり取ったりして、極悪人と共同の一族になるなどということは、ありそうもないことだというのである。また彼らの説では、テセウスがメガラの支配者ディオクレスを欺いて、メガラ人がもっていたエレウシスを奪い取

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

り、そしてスケイロンを殺したのは、テセウスがはじめてアテネに向って歩いて行った時ではなく、もっと後になってからだという。とにかくこれについてはこうした相反する説があるのである。

一一　ついでテセウスは。エレウシスでは、アルカディア出のケルキュオンをレスリングで投げて殺した。もう少し先に進んで、ヘルメウス[5]では、プロクルステス[6]といわれたダマステスを、このものが旅人に対してしてきたように、身の丈を無理に寝床に一致させて、殺した。このやり方は、ヘラクレスをまねたものであった。というのは、ヘラクレスもまた、攻撃をしかけたものどもに、彼らがそれまでやってきた悪だくみと同じやり方で仕返しをしたのであって、ブウシリス[7]を殺して神に献げ、アンタイオス[8]をレスリングで殺し、キュクノス[9]を一騎討ちで殺し、テルメロスを殺すにはその頭をうちくだいた。そこからしてテルメロスの禍という名が出たといわれている。すなわち、テルメロスは、多分、たまたま出会った人々に自分の頭をうちつけて殺したからである。このようにテセウスもまた悪者どもをこらしめて進んでいった。彼らはそれまで他の人々に暴力を加えてきたのであったが、テセウスによって暴力を加えられ、自分の不正な悪業のやり方で報復を受けたのであった。

一二　テセウスがさらに進んでケフィソス川のほとりまで来ると、フュタリダイ家[10]の男たちが向うからやってきて誰よりも先に歓迎した。そしてテセウスが穢れを浄めてもらいたいと頼むと、彼らは慣習に従って彼を浄め、宥めの犠牲を神々に献げ、家の中で饗応した。それまでは途中誰一人としてこういう親切な人に出会わなかった。

さてテセウスは、クロノスの月、今はヘカトンバイオンとよばれる月の八日に、アテネに到着したといわれている。町に着いてみると、公事は混乱と無秩序に満ち、アイゲウスとその家の事柄は私怨に乱れ切っていた。というのはコリントから逃げてきたメデイア[11]が、アイゲウスに子供ができないのを薬で癒してやると約束して、アイゲウスといっしょに暮していたからである。この女はテセウスのことを予知していたので、しかもアイゲウスがそれを知らず、老齢にもなり、国内の紛争のため何ごとにつけても恐れていたので、テセウスを客に招いて饗応し、これを薬で殺すように説得した。さてテセウスは朝食にやってきたが、自ら何者であるかを名乗ろうとはせずに、アイゲウスに発見のきっかけを与えようと欲して、肉がすすめられた時に、剣でそれを切るつもりでもあるかのように、剣を抜きはなち、アイゲウスにそれを見せた。アイゲウスは素早くそれを見てとって、毒薬をもった盃を投げ出し、身の上を問いただして彼を抱いた。そして市民たちを集めてそのことを知らせると、彼らはテセウスの男らしい勇気の故に、喜んで迎えた。盃が倒された時に薬がとびちったところは、今日デルフィニオン[12]において柵をめぐらしたところであって、アイゲウスはそこに住んでいたのであり、神殿[13]の東

---

(1) 二本の松を曲げて両脚をしばりつけてから松を放して人を殺していた。
(2) 乾かして詰物に使う草。
(3) 牝の猪を育てた老婆の名をとってこう名づけられたという。
(4) コリント地峡とメガラの中間の地。
(5) 一本にエリネオス、一本にヘルミオネ。
(6) 引きのばす人の意味。
(7) ギリシア神話のポセイドンの子、エジプト王で、エジプトに来た外国人を殺して神に献げた。
(8) ポセイドンの子として生まれた巨人でリビュアに住み、来る人にレスリングをいどんで殺した。
(9) 軍神アレスの子で、デルフォイに献上物をもってくる途中の人を襲って殺した。
(10) 名祖はフュタロス、デメテルがアッティカに来た時に彼が女神を歓迎したのでいちじくの木を授けられたという。
(11) コルキス王アイエテスの娘で、金の羊毛を取りに行ったアルゴ丸の勇士イアソンに恋してともに逃げ、後コリントに逃れ、さらに殺人を犯してアテネに逃げてきた魔女。
(12) オリンピエイオンの東と推定されている。
(13) デルフィニオンのアポロン神殿。

側のヘルメス像が「アイゲウスの門のそばのヘルメス」と呼ばれているのもその証拠だといわれている。

一三 さてパランティダイ家の人々は、それまで、子供のないアイゲウスが死んだら、自分たちが王位を獲得するだろうという希望をもっていたが、テセウスが後嗣ぎになると宣言されたので、アイゲウスがエレクテウスの一族とは血縁関係がないのにパンディオンの養子となって王位についている上に、今度はまたテセウスがこの国に渡ってきた他所者でありながら王位につくことになったのに我慢ができなくなって、戦争を起した。彼らは二手に分かれて、二方から敵を攻めるように、一手は父親に従ってスフェットスから公然とアテネの町に向って攻めのぼり、一手はガルゲットスに隠れて待ち伏せた。彼らの中にハグヌースの人でレオスという名の使者がいたが、この男がパランティダイ家の人々の計画をテセウスに密告した。そこでテセウスは待ち伏せている一隊を急襲して皆殺しにした。パラスに従っていた人々はこれを聞いて腐ったように散り散りになった。パレネ人の区がハグヌース区と通婚せず、また彼らの習慣に従って「民衆よ聴け」と触れることをしなくなったのは、彼らがこの男の裏切りの故にその名を憎んでいるからだといわれている。

一四 テセウスは、仕事にうちこんでいたいと思い、また同時にそれによって民衆の支持を得ようとして、テトラポリス[1]の住民に少なからぬ害を加えていたマラトンの牡牛に立ち向って行った。そしてこれを捕えて、生きながら町中を駆って人々に見せびらかし、それからアポロン・デルフィニオスに犠牲として献げた。

ヘカレ[2]がテセウスを客として招待してもてなしたという伝説も、全く真実を含んでいないわけではないように思われる。というのは、周囲の区の人々がヘカレ祭に集まってゼウス＝ヘカロスに犠牲を献げ、ヘカレが、まさに若者であったテセウスをもてなした時に、おばあさんがするように彼を抱き、そして愛称で呼んでもてなしてくれたことにちなんで、ヘカレを愛称でヘカリネと呼びかけて礼拝した。そしてテセウスが牡牛との戦いに出かける時に、彼女は、テセウスのために、もし無事にもどったら犠牲を献げるとゼウスに誓ったが、テセウスが帰り着かないうちに死んだので、テセウスの命令によって、そのもてなしに対して上に述べたような返礼を受けたのだ、とフィロコロスが歴史の中に書いている。

一五 それからしばらく後に、クレタから、貢物を取りに来る三度目の使[3]が到着した。ところでこの貢物については、アンドロゲオスがアッティカで死んだのは詐りの計略によると考えられたので、ミノスが戦争をしかけて人々に多くの害を与えたばかりでなく、精霊は国土を破壊した――凶作と疫病がひどくおこって川は乾あがった――上に、神の御告げも、彼らがミノスを宥めて和解すれば神の怒りは解けて禍も止むだろうと告げたから、使者をミノスのもとに送って懇願し、九年ごとに貢物として七人の若者と七人の娘を送るという取りきめをしたということは、大多数の著作家の一致して認めるところである。クレタに送り届けられた若者たち[4]は、最も悲劇的な伝説によると、ラビュリントスの中でミノタウロスに殺されたとか、迷い歩いて出口を見つけることができずにそこで死んだといわれる。そしてそのミノタウロスは、エウリピデスの言うように、

「いろいろな形の混合した無益のしろもの」

として生れ、また

「牡牛と人間との二つの本性が混合していた」

といわれる。

一六 しかしフィロコロスのいうところでは、クレタ人はこんなことを認めず、ラビュリントスは牢獄であって、囚人が逃亡できないこと以外に何一つ悪いところはない、ミノスはアンドロゲオスを記念して体育競技を催し、勝利者に褒美としてそれまでラビュリントスにつかまえておいたその若者たちを与えた、そしてそれまでの幾度かの競技に勝ったのは、当時ミノスのもとで最大の力をもっていたタウロスという名の将軍であったが、この男は性格が温和でも上品でもなく、アテネの若者たちを傲慢かつ苛酷に扱ったといっているそうである。アリストテレス自身も、『ポティアイア人の国制』の中で、例の若者たちがミノスによって

殺されたのではなくて、クレタで奴隷として奉仕しながら年をとっていった、と考えていることは明らかである。彼のいうところによれば、ある時クレタ人が昔の誓いを果たすために人間の初子をデルフォイに送り届けたことがあったが、その送られたものの中にあの若者たちの子供たちも混ざっていっしょに行ったそうである。しかしそこでは満足に生活していけなかったので、先ずイタリアに渡って、そこでイアピュギアのあたりに住みつき、そこからまたトラキアに移ってボティアイオイ族と呼ばれたそうである。このことからしてボティアイオイの処女たちは、ある犠牲の式を営むに当って、「アテネへ行こう」と歌うようになったのだそうである。

弁舌と詩に秀でた都市から憎まれるということは、まことに厄介なことであるようだ。というのは、ミノスはいつもアッティカの劇場では悪評を買って非難され続けているからである。ヘシオドスが「最も王者らしい」と呼び、ホメロスが「ゼウスの親しき友」（『オデュッセイア』一九巻一七九）と呼びかけても、ミノスには何の役にも立たず、悲劇詩人の方が優勢になって、舞台（イパイオン）からも舞台裏（スケーネー）からも、ミノスが残酷で横暴だという不評判をさかんに注ぎ放った。それでもなおミノスは王であり立法家であるといわれているし、ラダマンテュス[5]は審き人であり、ミノスによって定められたもろもろの正義の守護者であるといわれている。

一七　さて三度目の貢物の時が到来し、年頃の子供のある父親たちが、籤引に行かなければならなくなった時、市民の間から新たにアイゲウスに対して誹謗がおこってきた。すなわち、アイゲウスがこのことすべての元でありながら、自分ひとりだけこの刑罰に与らず、他所者の私生児に支配権を委ねておいて、市民たちが実の子を奪われて子供なしに取残されるのを黙視しているといって、彼らは嘆き悲しみかつ憤激したのである。こうしたことがテセウスにとっては悲しみであった。そして、これを抛っておかないで、市民たちと運命を共にするのが正しいと考えて、彼は自ら進んで行って籤引なしで自分自身をさし出した。この勇気は、他の人々にとっては驚くべきものに見え、彼らはこの民衆に尽くそうとするテセウスの心を愛した。アイゲウスは、頼んでも懇請してもテセウスが言うことを聞かず、心をひるがえさないのを見て、他の子供たちを籤引で選んだ。

ヘラニコスのいうところでは、籤に当った男女をアテネが送り出したのではなく、ミノス自身がやって来て選び出したのであり、この場合も取りきめに従って先ず第一にテセウスを選んだのだという。そしてその取りきめとは、アテネ人が船を用意すること、若者たちは身に「アレスの武具」を何一つ持たずに乗船航海すること、ミノタウロスが死んだ時にこの刑罰も終ること、というのであったという。

クレタに送られる若者たちには、命の助かる希望はさらさらなかった。そこで彼らは明らかな不運に向っていくものとして、黒い帆をあげた船を送り出していた。ところが今度はテセウスが父親を元気づけ、ミノタウロスを征服するだろうと豪語したので、アイゲウスは別の白い帆を舵取りに手渡し、帰る時テセウスが助かっていたら白い帆をあげ、そうでなかったら黒い帆をあげたまま航海して悲しみを表わせと命じた。

シモニデスによれば、アイゲウスから渡されたのは白い帆ではなくて「多くの花をつける紅解（べにかし）の花で染めあげられた紅（くれない）の帆」だったという。そしてこれを彼らの助かったしるしとしたのだという。また船の舵を取ったのはアマルシュアスの子フェレクロスだったとシモニデスはいうが、フィロコロスのいうところでは、そのころアテネ人の中には航海に心を

---

(1)　四市の意味でオイノエ、プロバリントス、トリコリュトス、マラトンの四村落を含むアッティカ東北部。
(2)　ヘカレ区の女神。
(3)　クレタ王ミノスの息子でパンアテナイア祭の競技に勝ったが相手に奸計をもって殺されたとも、マラトンの牡牛と戦って死んだとも伝えられる。
(4)　ミノタウロスを住まわせるために、クレタ王ミノスが作らせた迷宮。
(5)　ゼウスとエウロペの子で不死の楽園に赴き、また死者の審き人となったといわれる。

くだくものがいなかったので、テセウスはサラミスのスキロスのところから舵取りのナウシトオスと見張役のファイアクスを連れて来たのであって、それというのもスキロスの娘の子メネステスが例の若者たち[1]の一人であったからであるという。テセウスがファレロンのスキロスの神殿のそばに建てて献じたナウシトオスとファイアクスの神殿がこれを証明しており、舵取り祭（キュベルネーシア）[2]という祭りはこの二人のために営まれるのだといわれている。

一八　籤引が済むと、テセウスは籤に当った人々をプリュタネイオンから率いてデルフィニオンに到り、彼らのために命乞いの供物をアポロンに献げた。それは神聖なオリーヴの若枝に白い羊毛を巻いたものであった。祈り終えて海辺まで下りて来たのはムウニュキオン月の上旬の六日目であった。この日には今でも人々は神の心を宥めるために娘たちをデルフィニオンにやることにしている。またデルフォイの神（アポロン）がテセウスに神託を下して、アフロディテを案内者・道連れとして呼び出すように命じたので、海辺で山羊を犠牲に献げると、牝だったのがひとりでに牡になったという。そのためにこの女神はエピトラギア[3]とよばれるようになった、と伝えられている。

一九　テセウスはクレタに渡ると、多くの人々が書いたり歌ったりしているように、恋におちたアリアドネ[4]から麻糸を受け取り、どうすればラビュリントスの迷路から抜け出られるかを教わり、ミノタウロスを殺し、そしてアリアドネも若者たちも連れて船出した。ところでフェレキュデスのいうところによると、テセウスはクレタ人の船の船底に穴をあけて追跡を妨げたそうである。デモンのいうところでは、ミノスの将軍であるタウロスも、出帆しようとしていたテセウスと港で海戦を演じて殺されたという。他方フィロコロスの歴史記述によれば、ミノスが競技を催した時、タウロスはまたもやすべての人に勝ちそうだとねたまれていたという。というのは彼の権力は彼の性格の故に嫌われていたし、またパシファエ[5]に近づきすぎるという悪評を受けていた。そのために、テセウスが競技に出たいと申し出ると、ミノスはそれを許した。クレタでは女も見物するのが習わしであったから、アリアドネも列席して、テセウスの風采に心打たれ、すべてのものに勝っていくその技倆に驚嘆した。そしてミノスは、タウロスがレスリングで倒されて泥だらけにされたのをことのほか喜んで、テセウスに若者たちを返し、アテネ市に対しては貢物を免除した、というのである。

クレイデモスはこれらのことについて、ずっと以前に、はじめて、独特かつ詳細に、次のように報じている。いかなる三段橈船も五人[6]以上の人を乗せてどこからも出航してはならないという全ギリシア人共通の契約があったが、アルゴ[7]の指揮者イアソンだけは……[8]海から海賊を駆逐するために航海してまわった。ダイダロス[9]が船でアテネに逃げた時、ミノスは規約に反して大きな軍船で追ったが、冬嵐によってシシリーに運ばれ、そこで命を終った[10]。その子デウカリオンはアテネ人に対して敵意をいだき、使者を送って、ダイダロスを自分に返せと命じ、さもないとミノスが人質に取った若者たちを殺してしまうと脅かした時、テセウスは、ダイダロスが血縁関係においてはエレクテウスの娘メロペを母としているから自分には従兄弟に当るので、その求めには応じないでおとなしく答える一方、自分では造船に取りかかったが、人[11]に気取られまいとして、一部は旅人の往来する道から離れたテュマイタダイで、一部はピッテウスの手を借りてトロイゼンで、仕事を進めた。そして船の準備ができあがると、ダイダロスを伴い、クレタからの亡命者たちを道案内として出帆した。クレタ人は誰一人これを見抜くものがなく、クレタ人に味方する船が近づいてくるものと考えたので、テセウスは港を占領し、上陸するやクノッソスに迫って到着し、ラビュリントスの門で交戦して、デウカリオンとその親衛隊を殺した。そしてアリアドネが国事の中心になっていたので、これと和議を結び、若者たちを取り返し、アテネ人とクレタ人の友好を定め、今後決して戦争をはじめないことを誓ったという。

二〇　これらのことについても、アリアドネについても、このほかにも多くのことが伝えられているが、一致する伝えは一つもない。ある人は彼女がテセウスに見すてられて首をつったといい、ある人は、彼女は船

乗りたちによってナクソス島につれて行かれて、ディオニュソスの祭司オイナロスと一緒に暮すようになったが、それはテセウスが別の女を愛するようになって、彼女が見すてられたからだ、という。

「パノペウスの娘アイグレへの恋情が彼を疲れさせた。」メガラ人ヘレアスのいうところによると、この句をペイシストラトスがヘシオドスの詩から削ったのは、アテネ人を喜ばせるために、彼がホメロスの地獄行きのところ（『オデュッセイア』二巻三六一）に

「誉れ高き神々の子らテセウスとペイリトオスを（見た）」

という句を挿入したと同様だという。またある人々は、アリアドネがテセウスによってオイノピオンとスタフュロスを生んだといっているが、そういう人の一人にキオスの人イオンがおり、自分の祖国について

「かつてテセウスの子オイノピオンがこれを建設した」

と語っている。

こうした伝説のうちで最も縁起のいい話は、すべての人がいわば口の中にもっている。しかしこれらのことについて独特な物語を、アマトウス[9]の人パイオンが発表した。すなわち彼のいうところによれば、テセウスが冬嵐のためにキプロスに吹きよせられた時、アリアドネは身重になっていて、海の揺れのために船酔いになって苦しんでいたのを、ただひとり上陸させて、自分は船を助けるために再び陸から沖へ出たという。そこで島の女たちはアリアドネを救いあげ、孤独によって気落ちしている彼女をいたわり、テセウスが彼女に書いてよこしたものだといって偽の手紙を届け、陣痛の時には苦痛を共にして手助けをし、子を産み落とさずに死んだ彼女を手厚く葬ったという。一方テセウスは島にもどって来て深く悲しみ、島の人々に金を残して、アリアドネに犠牲を供えることを命じ、小さな立像二体、一つは銀、一つは青銅のを献げたという。またゴルピアイオスの月[10]の上旬の二日目に行なわれる供犠においては、若者たちの一人が床に就いて産婦のような声を出し身振りをするという。そしてアマトウスの人々はその墓のある森を、アリアドネ・アフロディテの森とよんでいるという。

ナクソス人のある者は二人のミノスと二人のアリアドネがいたという独特の物語を伝えている。それによると、一人のアリアドネはナクソス島でディオニュソスと婚してスタフュロスとその兄弟を生み、もう一人の若い方のアリアドネはテセウスに誘拐され見すてられてナクソスに来たが、彼女と一緒に来た乳母はコルキュネという名で、その墓は今日でも見られるという。このアリアドネもここで死んだが、前のアリアドネとはちがう尊敬のしるしを受けており、前のアリアドネの祭りには人々は楽しい面白い催しを行ない、後のアリアドネの祭りに行なわれる供犠には、何かしら悲しみと憂いが混ざっている、というのである。

二一　さてテセウスは、クレタから出帆してデロス島に船をつけ、その神（アポロン）に犠牲を献げ、アリアドネからもらったアフロディテの像を奉納し、若者たちとともに踊りを催したが、その踊りは今でもデロスの人々が行なっているといわれるもので、ラビュリントスの中の迷い道と抜け道とを、交互に交錯したり開いたりする動きから成る一種のリズムによって模倣したものである。この種の踊りをデロス人は鶴と呼んでいる、とディカイアルコスが伝えている。テセウスはこの踊りをケラ

---

(1) 貢物としてクレタに送られるはずのもの。
(2) 十月に行なわれたテセウス祭の一部。
(3) 牡山羊に変えるもの。
(4) ミノスの娘。
(5) ミノスの妻。
(6) 一本「五十人」。
(7) 金の羊毛を取りに行った勇士たちが乗った船の名。
(8) 欠文、「十分な船乗りをのせた三段橈船で」と補う。
(9) クレタの神話的名彫刻家でラビュリントスも彼の作と伝えられた。
(10) ヘロドトス七巻一七〇参照。
(11) ピレウス西北の丘一つへだてた地。
(12) キプロスの地。
(13) マケドニア暦第十一月、今の八月から九月に当る。

トンという祭壇のまわりで踊ったが、その祭壇は縁起のいい左側の角だけを組み立てたものであった。また伝えるところでは、テセウスはデロスで競技を創め、この時はじめて勝利者がテセウスによって棕梠の枝を与えられたといわれている。

二二　次いで伝えるところでは、アッティカに近づいた時、テセウス自身も舵取りの男も、喜びのために、自分たちの無事をアイゲウスに知らせるしるしとなるはずだった〔白い〕帆をあげることを忘れていたので、アイゲウスは絶望して石の上から身を投げて死んだという。テセウスは、船を岸につけると、出帆に当ってファレロンで神々に誓った犠牲を供えるとともに、無事を知らせる使者を町に送った。その使者は王の死を悲しむ多くの人々に出会った。しかし、当然のことながら、中にはテセウスの帰還を喜び歓迎し、無事を祝って彼に花冠を献じようとする気になっているものもいた。使者は花冠を受けて使者用の杖にかけ、海岸に立ちもどってみると、テセウスがまだ酒を灌ぐ儀式を終っていなかったので、供犠の式を乱すことを欲せず、聖域の外で待っていた。そして酒を灌ぐ儀式が終ると、彼はアイゲウスの死を告げた。人々は嘆き悲しみつつ大急ぎで町にのぼった。今日でもオスコフォリア[1]において、使者ではなくて使者の杖に花冠をかぶせ、酒を灌ぐ式に列なる人々が「エレレウ、イウ、イウ」と唱えるのは、そのためだといわれている。この文句の前の方は、急いでいる時や勝利をたたえる時に発するのを習わしとするもので、後の方は驚愕と困惑の時の叫びである。

テセウスが、父を葬ってから、アポロンに誓いを果たしたのは、ピュアネプシオンの月の上旬の七日目で、この日に彼らは無事町に帰り着いた。ところで豆類を煮る習慣は、助かった人々が、残っていた食糧を一つにまぜ合せ、同じ釜で煮て、互いに分け合って食べ尽くしたことから出たといわれる。この会食の時に彼らはいわゆるエイレシオネを持ち歩いているが、これはテセウス当時の命乞いのしるしと同じように、オリーヴの枝に羊毛を巻きつけ、不毛を終らせるためにあらゆる種類の初穂を豊かに懸けたものである。それを持ち歩いてつぎのように歌うのである。

「エイレシオネもたらすは、いちじく、豊かなパン、
壺の蜂蜜、体に塗り浄めるオリーヴ油、
酔って寝るための、盃にあふれる生の葡萄酒。」

もっとも中には、これらの儀式は、アテネ人からそんなふうにして食物を与えられたヘラクレスの子孫にちなんでおこったのだという人々もいる。しかし多くのものは前述のようにいっている。

二三　テセウスが若者たちと一緒に乗って出帆し、無事にもどって来たその三十橈船は、ファレロンのデメトリオス[2]の時代に至るまでアテネ人が保存していた。彼らは古い木材を取り去り、その代りに別の丈夫なのをあてがってもとどおりに組み立てたので、この船は哲学者たちの間で、成長をめぐる未解決の論議の一例となった。すなわち、ある者は船は同じままであるといい、ある者は同じままではないというのである。

アテネ人はオスコフォリアの祭りを行なっているが、それはテセウスが定めたものであった。すなわち、テセウスはあの時籤に当った処女を全部連れていったのではなくて、ともに親しみ合っている青年のうち、見たところ女のようで若々しいが、魂は雄々しく積極的な二人を、温浴と、日影の生活と、髪や柔肌や顔色をよくする油と、身を飾ることによって、本物の女のように全くつくり変えてしまい、さらに声と振舞いと歩き振りを処女そっくりで少しも違うところがないように教えこんだ上で、誰にも気付かれずに、処女の人数に入れた。テセウスが帰国した時、彼もその二人の若者も、今日実のついた葡萄の枝を持ち歩く人が装うと同じようないでたちで行列に加わった。今日これを持ち歩くのは、神話にちなんで、ディオニュソスとアリアドネをたたえるためであるともいわれるが、むしろ彼らが葡萄を摘む季節に帰って来たからである。また「食事をはこぶ女たち」が選び出されて供犠の儀式に加わるのは、籤に当ったあの人々の母親を模倣したものである。というのは彼女らは何度もやって来て息子や娘に肉やパンを持って来てやったからである。またその祭りで物語が語られるのは、母親たちがその子供たちを慰め激励す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com